

キリスト・イエスにある信仰により義とされる

先週はむだになる走りではなく勝利のために走る、という話をしました。パウロはこれを書いた時（ガラテヤ 2:2）、救い（それは賜物（ギフト）である）を失うということではなく、むしろキリストにある報酬を失うことを恐れていた、ということを確認にしたいと思います。賜物と報酬の違いをはっきり理解することは大切です。聖書には両方書かれています。例えば、救いは自分で得ることはできない神からの賜物であり、ユダヤ人に生まれることも自分の努力によるものではありません。ただし、人生におけるすべてのことが賜物ではないし、聖書には、ただ単に賜物として受けるのではなく、キリストのさばきの座で行いに応じて受ける天の報いについて述べられています（2 コリント 5:10）。今日は、救いとは自分で得られるものではなく、キリスト・イエスにおく信仰による義認を通して私たちに与えられるものだとすることを学んでいきます。

偽教師たちがガラテヤの人々をどんなに簡単に騙すことができたか想像できます。聖書にはこの偽教師たちがどのようにして人々を騙したのかは書いてありませんが、今日の箇所、ガラテヤ 2:11以降から何が彼らの教理を後押しすることになったのかを垣間見ることができます。クリスチャンになってからもユダヤ教の律法を守ることが必要だと受け取られる行動をとった人として使徒ペテロ、ヤコブ、バルナバの名前が挙げられています。彼らは律法を守ることが必要だと説いたわけはありませんが、そうととられる行動をとり、特定の指導者たちの前ではユダヤ教の習慣を守るよう要請しているかのように見えました（12-14 節）。行動は言葉よりも雄弁だと言いますが、この場合もそうでしょう。ペテロ、ヤコブ、バルナバの行動が、旧約聖書の御言葉、さらにユダヤ教の伝統と合わせて、律法を守ることが義認のために必要な要素だという偽教師たちの教理をあおる根拠になったのでしょうか。（もし割礼の重要性について知りたければ神様がアブラハムと結んだ契約を参照ください（創世記 17:9-14）。）使徒パウロは人々の前でペテロをとがめ、義認は律法を守ることによって得られるものではない、ということを確認にせざるを得ませんでした。

義認について話す前に、義認とは何か、ということを見てみます。義とされる、とは法的に罪がなく神の前に正しい、ということです。英語では「今まで一度も罪を犯したことがないように正しい」と表現することができます。私たちでさえそのようになれるとは驚くべきことです。福音のメッセージでは、私たちがイエス・キリストに信仰をおけば、過去、現在、未来の罪から法的に解放され義と認められるというのです。ここで、義認が意味しないことも指摘しておきましょう。義認は「聖化」と同義ではありません。聖化とは私たちの生活の中で聖くなっていく過程をいいます。私たちは法的に義と認められても、実際にはこのからだの中に生きているので、聖霊と調和して生きていくことが必要です。これについてはパウロの手紙をもっと読んでいくと触れますが、聖化とはクリスチャンライフにおける報酬的な局面になります。義認は自分の力で得るものではない賜物であるのに対し、聖化はさばきの日に報いとして与えられるものです。

それでは義認に戻しましょう。義認とは罪がないことです。罪人として生まれた私たちが自分の力や律法を守ることによって得られるものではありません。律法についてあまりご存じない方もいるかもしれませんが、律法とは神様と、また他の人との関係を教えるため神様がユダヤ人に与えた厳しい規則や規定のことを言います。律法とは良いもので、神様が私たちに与えたものですが、それは単に義を示すもので、義を生み出すものではありません。もしも律法が義を作り出すことができたならイエス様は私たちの代わりに死ななくてもよかったです。私たちは自分たちではどうすることもできなかったのでイエス様が私たちを救うために来てくださったのです。救いとは罪の義認と神様の義に生きるため、イエス様に信仰をおくことによるのみ与えられるものです。